

土器（第8～10図）

1は覆土中から出土した大型深鉢土器である。床面から若干の間層をはさんで、概ね3カ所に分かれて出土した。キャリパー形の深鉢で、口縁部から胴下半部にかけての部分が残存する。水平口縁で、口縁部には楕円形区画文と形骸化した渦巻文からなる文様帯を持つ。頸部は無文帯を持ち、胴部には幅広の沈線を伴う2本一組の隆帯によって大柄の渦巻文が描かれる。地文はR L単節の縄文で、口縁部では横位回転、胴部では縦位を基本としてモチーフに沿って充填施文されている。

現存高 54.1 cm、復元最大径 66.5 cmである。胎土はややシルト質で、白色の砂粒を混入する。

2は石囲い炉の北東部の床面から出土した伏甕である。キャリパー形深鉢で、胴部中段以下を欠失している。

幅広の沈線を伴う扁平な隆帯により文様が描かれる。口縁部に区画文が巡り、形骸化した渦巻文が4単位配される。渦巻文の直下には小楕円形のモチーフが重畳して縦位の区画帯を形成し、胴部文様帯を縦に4分割している。区画帯の左右には大柄の渦巻文が描かれ、末端はわらび手状の小渦巻文となっている。

文様は1の大型深鉢と酷似するが、頸部に無文帯をはさまない点は異なっている。地文はR L単節の縄文で、口縁部では横位回転、胴部では縦位を基本としてモチーフに沿って充填施文されている。現存高 24.4 cm、復元最大径 33.3 cmである。胎土に多量の砂とシルトを含む。

3は出入り口部の埋甕である。胴下半部をほぼ水平に打ち欠いているほか、口縁部も欠失しているが、こちらは埋設後の風化により失われた可能性もある。寸胴気味の器形で胴部中段に軽微なくびれを持ち、全面に櫛歯状工具による縦位の条線が施文される。図化はできなかったが、口縁側の破断面に、部分的に直径2～3mm程度の刺突痕をみることができ、口縁直下に列点文が巡っていた

ものと考えられる。現存高 14.6 cm、復元最大径 17.8 cmである。胎土にチャート・片岩等の垂角礫が含まれる。外面上半部には煤が付着し、内面は篋磨きが徹底される。

4は小型精製の深鉢口縁部である。大半が覆土中からの出土だが、一部の破片が伏甕付近から出土している。

口縁部文様帯を持たず、平行沈線による波状ないし逆U字の磨り消しモチーフが連続して描かれる。地文はR L単節の縄文で、口縁直下では横位回転、他は縦位回転で施文されている。現存高 7.0 cm、復元最大径 24.3 cmである。外面に煤の付着が観察される。

5以下は破片資料を一括した。ほとんどが加曾利EⅢ式期に属するが、一部新しい時期のものも含まれる。

5～11はキャリパー形深鉢の口縁部である。扁平な隆帯と幅広の沈線で楕円形の区画文を構成する。渦巻文はみられないが、形骸化が進んでいるものとみられる。口唇断面は丸く肥厚するものが多いが、7・8ではほとんど肥厚せず内削ぎ状になっている。

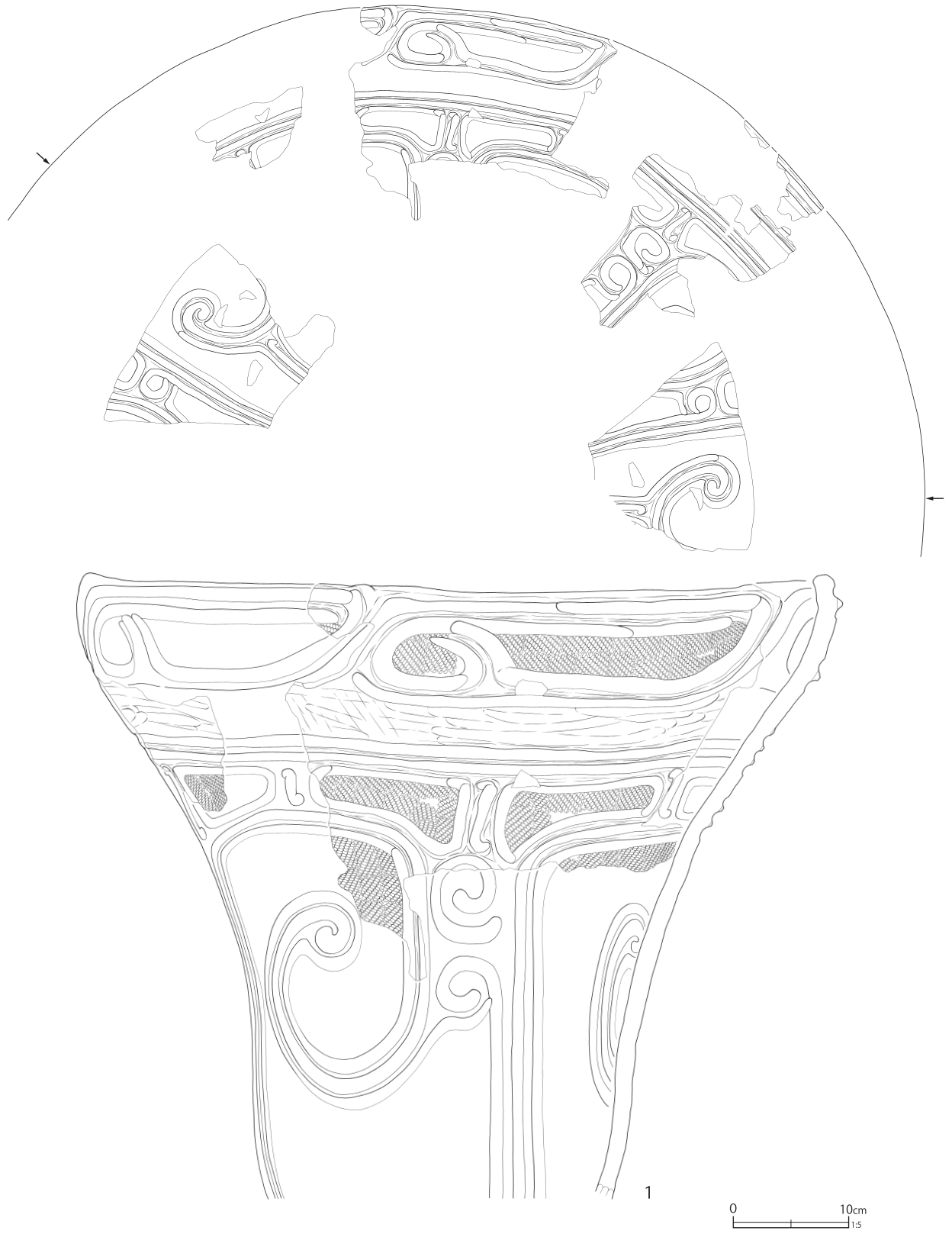
12～14は口縁部文様帯と胴部との境界部分の破片である。隆帯+沈線により楕円形区画が描かれ、胴部の磨り消し懸垂文に接続している。

15～21は磨り消し懸垂文の胴部である。18は地文部に単沈線による蛇行懸垂文が描かれる。

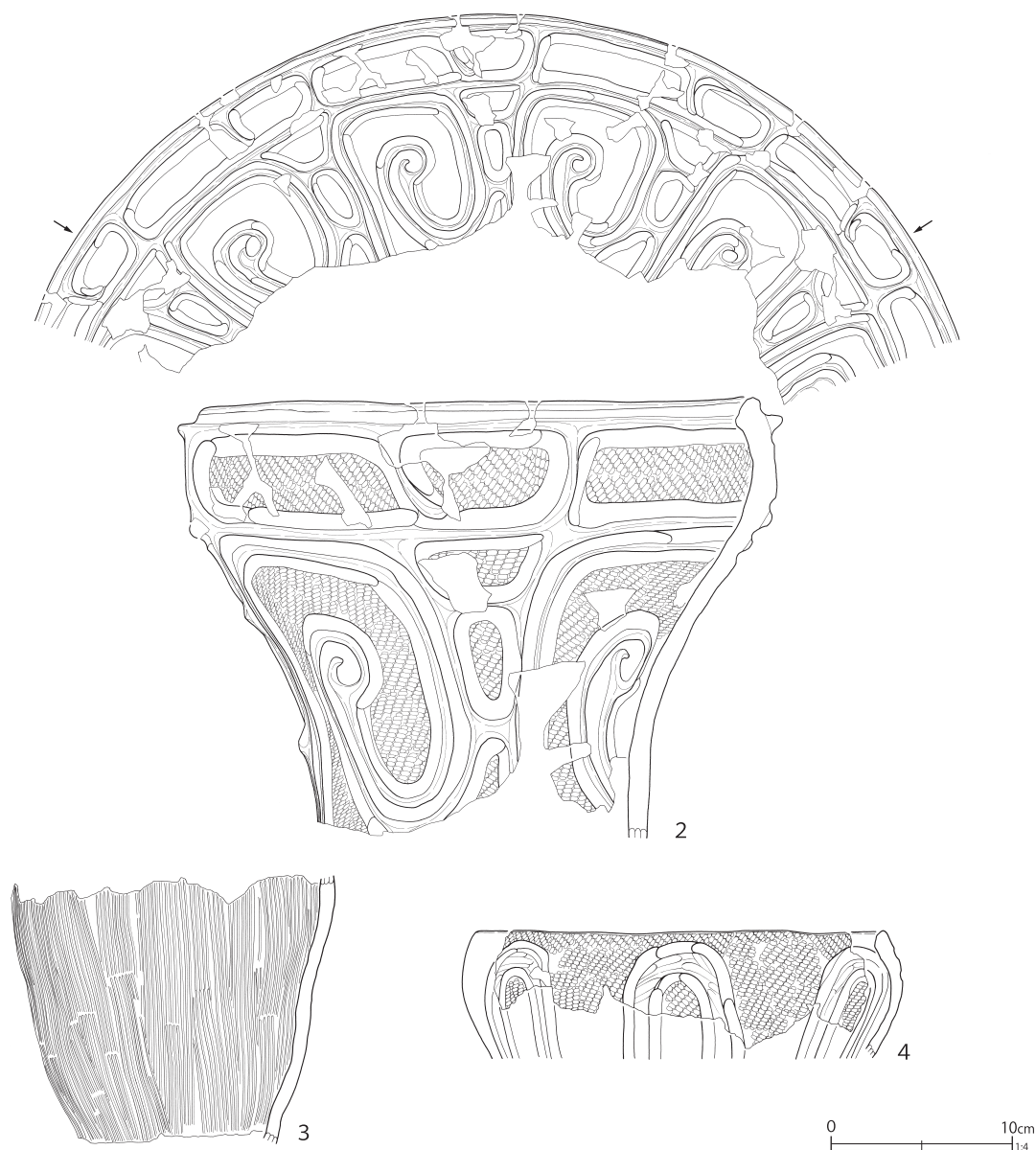
22～24は口縁部文様帯を喪失する一群である。地文縄文は縦位回転を基本として口縁直下のみ横位回転となっている。22は単沈線による逆U字文が描かれる。23は磨り消しによる逆U字文である。

25は磨り消し縄文のみられる破片で、内面が剥落するが、強く内湾する胴上半部とみられる。

26・27は磨り消し縄文によるH字文がみられる。28は磨り消し文様の間隙にわらび手状の沈線が描かれる。



第8图 第1号住居跡出土土器(1)



第9図 第1号住居跡出土土器(2)

29は加曾利EⅣ式で、小型精製深鉢の口縁部である。緩やかな波状口縁をなすものとみられ、胴部に磨り消し縄文による鋸歯文が描かれる。

30は無文地に鋭利な沈線文のみられる胴部で、同時期のものと考えられる。

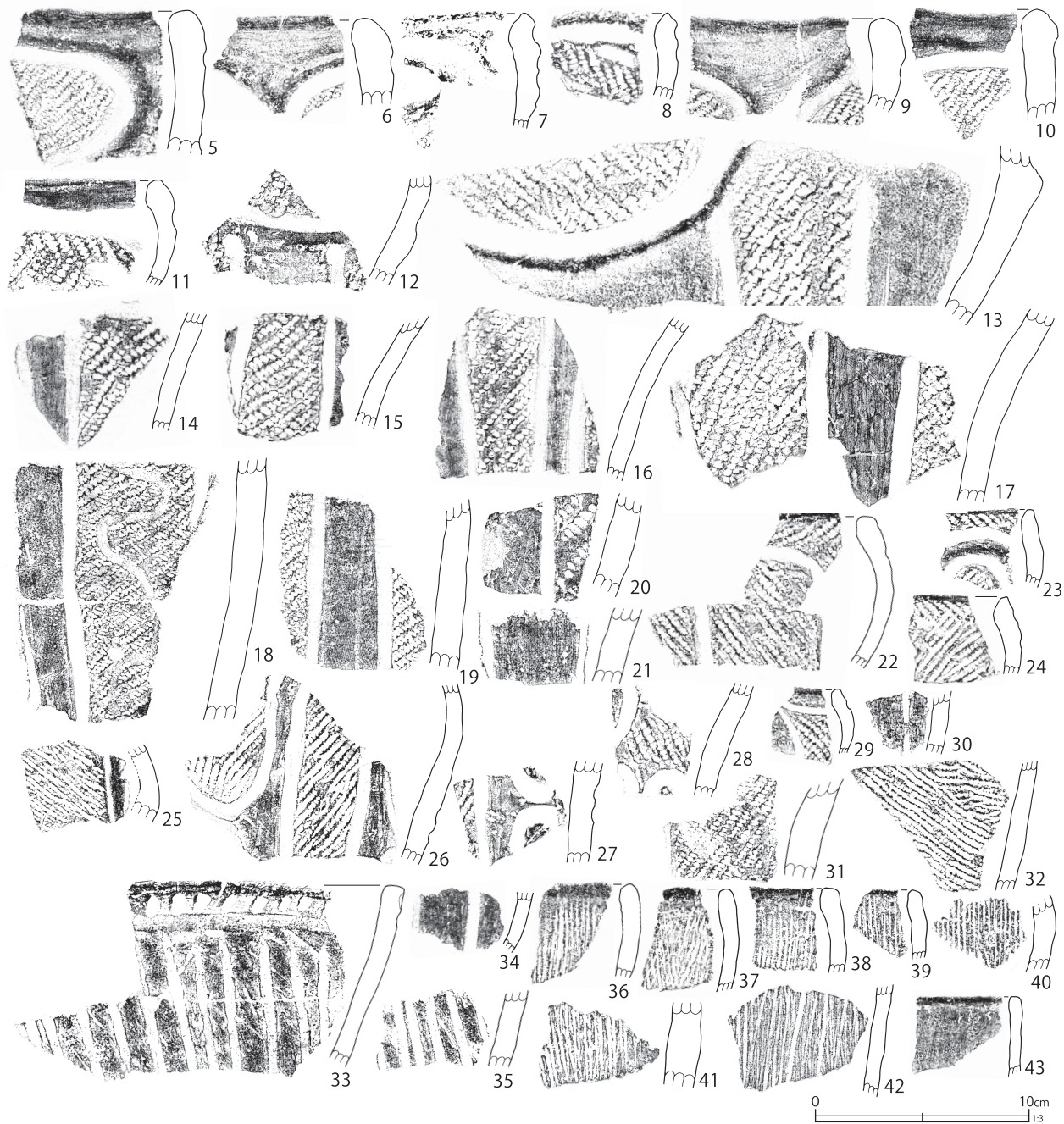
31・32は縄文のみの胴部破片である。加曾利EⅢ式期のものと考えた。31は左側に縦位の沈線がみられ、磨り消し懸垂文の一部と考えられる。

33は沈線地文の土器である。口縁直下に篋状工具末端による斜位の刺突列が巡り、胴部との境

を1条の沈線で区画する。胴部には縦位の集合沈線が密に施文される。地文は持たず、篋状工具による斜位の撫で調整が観察される。

34・35も類似の沈線地文がみられ、35は33と同一個体の可能性もある。

36～42は櫛歯状工具の条線を地文とする土器である。36～39は小型の深鉢口縁部である。口唇断面は丸頭棒状でわずかに肥厚する。40～42は胴部破片である。43は無文の深鉢口縁部で、縦位の研磨が観察される。



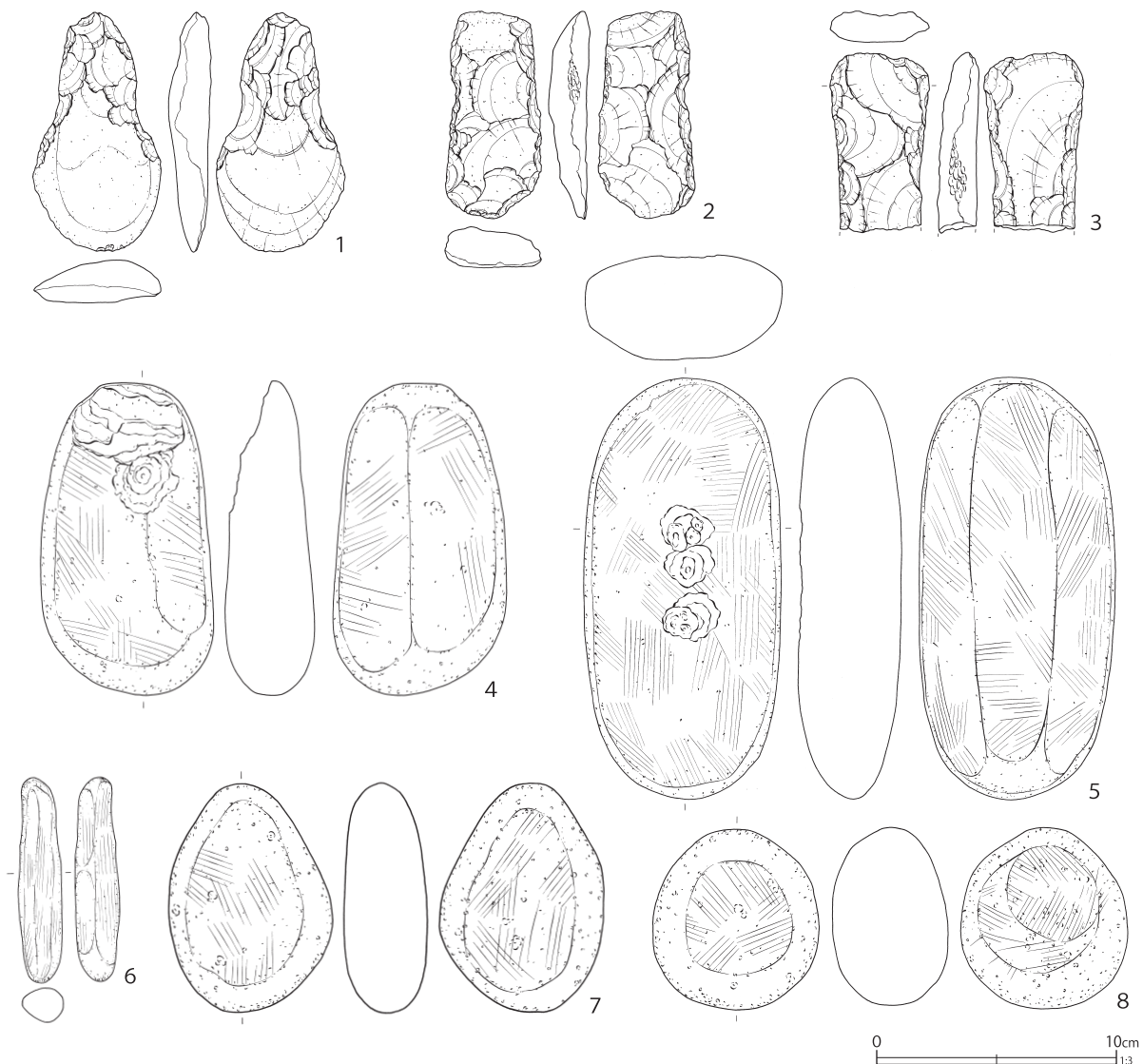
第10図 第1号住居跡出土土器(3)

石器(第11・12図)

1～3は打製石斧である。1は覆土上層から出土した撥形の石斧である。胴部から基部にかけて細かな調整剥離が集中する一方、刃部はほとんど無加工で、未成品の可能性もある。刃部は楕円形で、背面に原礫面、腹面に主要剥離面を残している。全長9.9cm、幅5.3cm、厚さ1.9cm、重さ92.8gで、石材は砂岩である。

2は短冊形で、背面基部側に原礫面を残す。背面両側縁、腹面右側縁からの調整剥離により長方形のプローションを作り出している。全長8.6cm、幅4.0cm、厚さ1.7cm、重さ65.8gで、石材は安山岩である。

3は刃部を欠失するが、短冊形の打製石斧であったと考えられる。両側縁が内向きに緩やかなカーブを描き、基部末端が末広がりになっている。



第11図 第1号住居跡出土石器(1)

現存部分の長さ7.5cm、幅4.1cm、厚さ1.7cm、重さは71.0gで、石材は安山岩である。

4～8は磨り石およびその転用品と考えられる。4は長楕円形の自然礫を両面使用し、片面が凹石に転用されている。長さ13cm、幅7.2cm、厚さ3.7cm、重さ489.7gで、石材は閃緑岩である。

5は小判型の磨り石で、両面および側縁部がいちじるしく使い込まれ多面体を形成している。また、片面が凹石として転用されている。長さ17.5cm、幅8.2cm、厚さ4.3cm、重さ1019gで、石材は閃緑岩である。

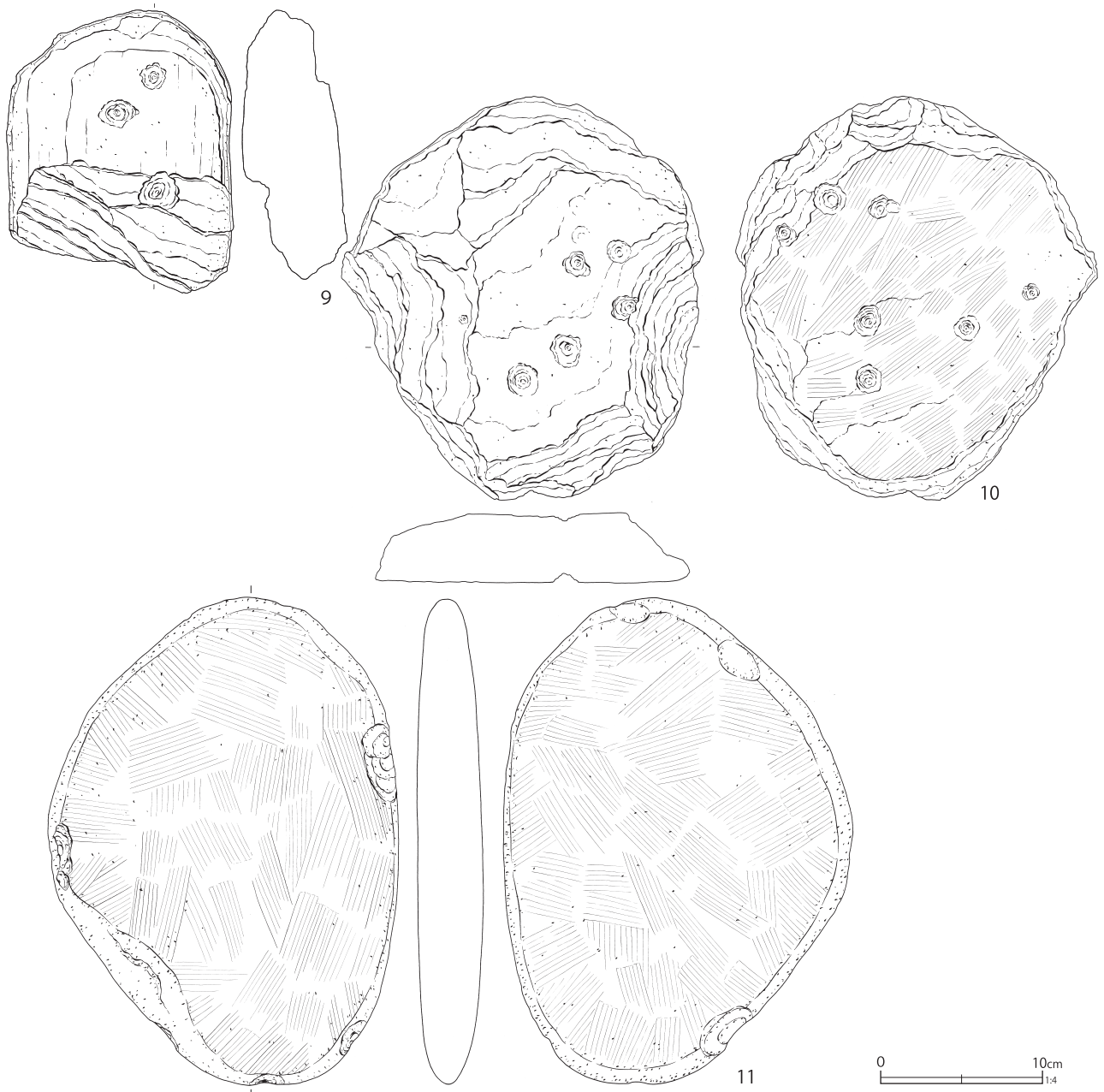
6は棒状の磨り石で、ハンマーとしても使われ

た可能性がある。側面に擦痕、両端部にあばた状の打痕が残される。長さ8.5cm、幅1.9cm、厚さ1.5cm、重さ27.9gで、石材は砂岩である。

7は扁平な自然礫の両面を使用する。長さ9.4cm、幅6.8cm、厚さ3.4cm、重さ322.8gで、石材は閃緑岩である。

8は円形の磨り石で、両面を使用する。長さ7.4cm、幅6.9cm、厚さ4.8cm、重さ363.9gで、石材は閃緑岩である。

9は凹石である。板状節理の自然礫をほぼ無加工で使用し、片面のみ3か所の円孔が観察される。長さ16.7cm、幅13.9cm、厚さ6.4cm、重さ



第12図 第1号住居跡出土石器(2)

1614.6gで、石材は絹雲母片岩である。

10は石皿片とみられる。表面右下に石皿としての使用面であるすり鉢状の凹部が残るほか、扁平な背面にも広く擦痕が観察される。また、凹石としても転用され、表裏に複数の円孔が観察された。長さ24.9cm、幅22.3cm、厚さ4.4cm、重さ3387.2gで、石材は絹雲母片岩である。

11は石皿である。扁平な自然礫をほぼ無加工で使用する。表裏に平坦な使用面を持ち、擦痕が

観察される。長さ30.0cm、幅21.5cm、厚さ4.0cm、重さ4408.5gで、石材は閃緑岩である。

このほかに、図化し得なかったが磨り石片4点が出土している、石材はいずれも閃緑岩である。また、剥片・石核類が14点出土している。石材は、小型の剥片ではチャートを中心に黒曜石や黒色頁岩が若干混じる。大型の剥片には安山岩と黒色頁岩が存在する。

2. 遺構外出土遺物

縄文土器 (第13図)

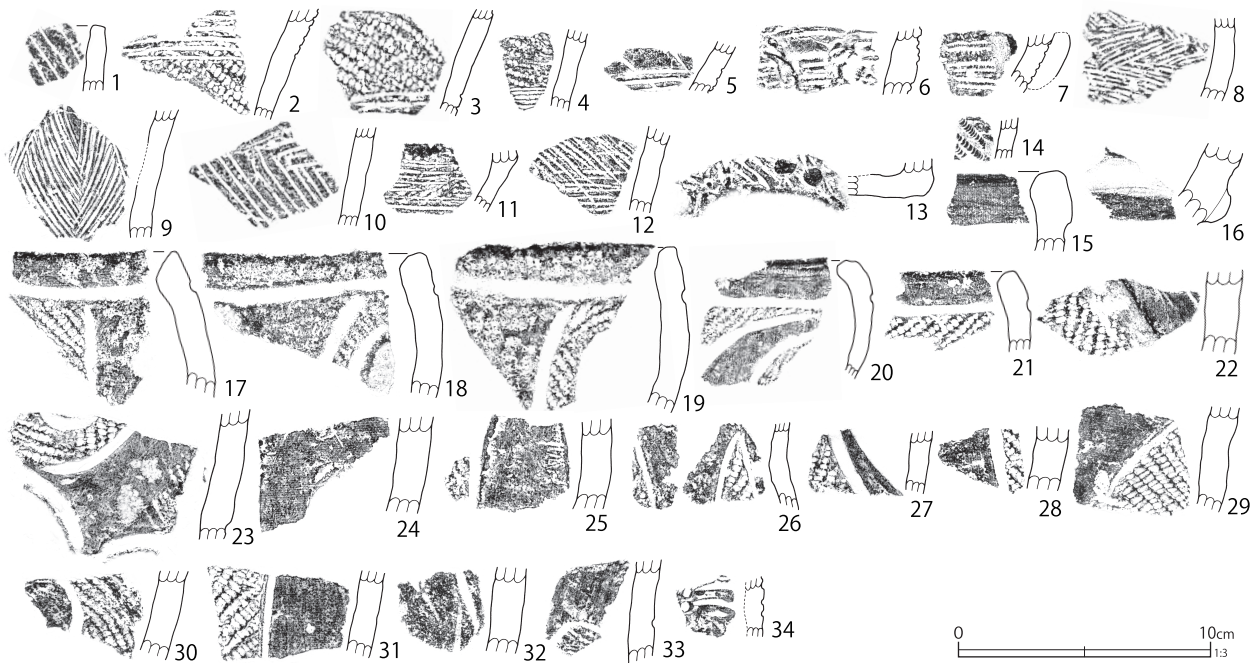
縄文時代前期から後期にかけての土器が出土している。1～5は前期の諸磯b式である。半裁竹管状工具による沈線文を地文とする。1は口縁部で、斜位の集合沈線文がみられる。2～4は地文縄文上に集合沈線が横走する。5は斜位の沈線と横位の沈線区画が交錯する。

6～13は諸磯c式である。6・7・11は横位の、8～10・12・13は斜位ないし矢羽根状の集合沈線を地文とする。また、6～8は貼付文を持つ。

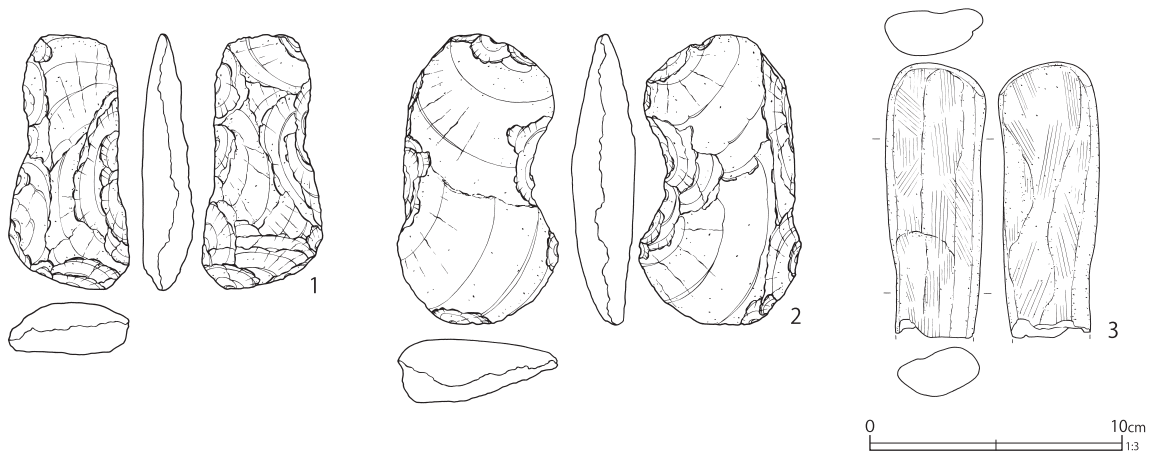
14は前期末葉の十三菩提式で、結節浮線文がみられる。

15・16は中期後葉の加曾利EⅢ式である。15は断面肥厚する口縁部で、幅広の沈線が巡る。16は口縁部文様帯下端を区画する隆帯で、幅広の沈線を伴っている。

17～21は中期末葉から後期初頭にかけての土器群である。17～19は口縁直下に1条の沈線が巡り、これに胴部の磨り消し懸垂文が連結する。18は磨り消し縄文による渦巻文がみられる。20は磨り消し縄文による波頭状のモチーフで、



第13図 遺構外出土土器



第14図 遺構外出土石器

左右に対向して玉抱き文を構成するものと考えられる。

22～33は同時期の胴部破片で、一部に加曾利EⅢ式が含まれる可能性がある。22は断面三角形の微隆起線文による磨り消しモチーフが描かれる。23以下は沈線による磨り消し縄文である。23は胴部中段のくびれ部分で、胴上半部には渦巻文が展開する。26は下方に開放する逆V字のモチーフで、上方にも同様のモチーフが対向して配置されるものと考えられる。

34は後期前葉の堀之内1式である。上下一対の盲孔を起点として平行沈線文が展開する。

石器 (第14図)

1はC区の攪乱から出土した短冊形の打製石斧である。両側縁にごく緩いくびれを持つ。刃部は

鈍角で、胴部に反りを持たない。全長10.0cm、幅4.75cm、厚さ1.9cm、重さ99.7gで、石材は安山岩である。

2も打製石斧で、第1号溝跡から出土している。分銅型の打製石斧だが、一側縁はくびれを持たずほぼ直線となっている。両側縁および基部に表裏からの調整剥離がみられるが、刃部はほとんど無加工である。刃部は鈍角で、胴部に反りを持たない。全長11.4cm、幅6.35cm、厚さ2.5cm、重さ204.4gで、石材は安山岩である。

3はC区の攪乱から出土した有溝砥石である。扁平棒状の自然礫であるが、一端を欠損する。全面に擦痕が残され、片面のみ長軸方向に雨樋状の凹部が存在する。現存部分の長さ10.8cm、幅4.0cm、厚さ1.8cm、重さ141.4gで、石材は緑色岩である。

3. 土壌

土壌は33基検出された。いずれも近世の遺構である。調査区の東側と西側の二か所にまとまりが見られ、平面形態は不整形のものが多いが、中には長軸60cm前後の方形の土壌や長軸2.30mの短冊形の形態も見られた。

第1号土壌 (第15図)

D-4グリッドから検出された。平面形態は隅丸方形である。規模は長軸0.63m、短軸0.58m、深さ0.13m、長軸方位はN-53°-Eである。

第2号土壌 (第15図)

D-4グリッドから検出された。南側は調査区域外にあたる。平面形態は不整形である。規模は長軸1.66m、検出範囲で短軸1.27m、深さ0.24m、長軸方位はN-70°-Eである。

第3号土壌 (第15図)

D-4グリッドから検出された。平面形態は隅丸方形である。規模は長軸0.82m、短軸0.49m、深さ0.08m、長軸方位はN-82°-Eである。

第4号土壌 (第15図)

D-4グリッドから検出された。平面形態は隅

丸方形である。規模は長軸0.64m、短軸0.55m、深さ0.12m、長軸方位はN-46°-Eである。

第5号土壌 (第15図)

D-4グリッドから検出された。平面形態は楕円形である。規模は長軸1.10m、短軸0.49m、深さ0.19m、長軸方位はN-51°-Eである。

第6号土壌 (第15・17図)

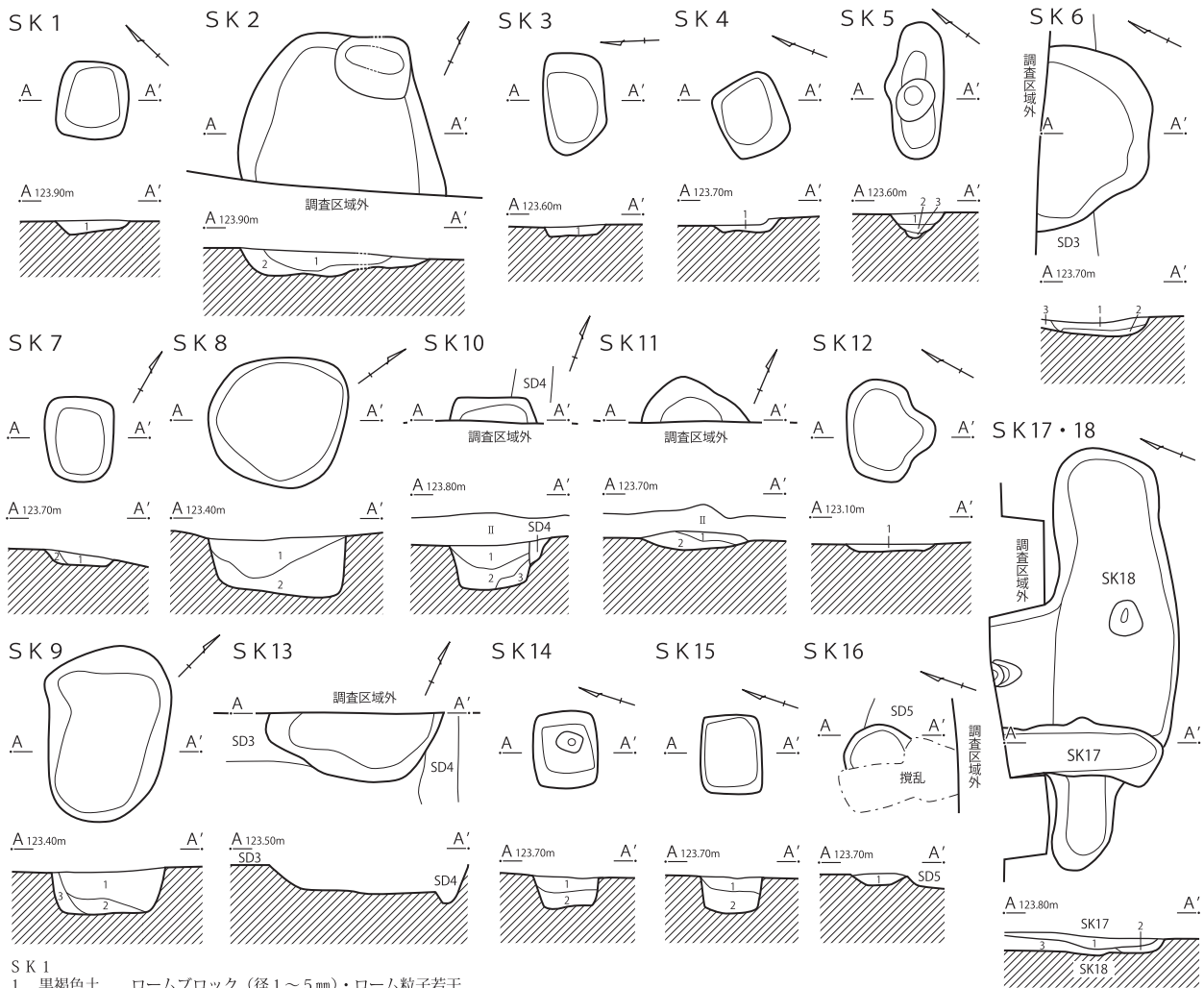
D-4グリッドから検出された。北側は調査区域外にあたる。平面形態は不整形である。規模は長軸1.48m、検出範囲で短軸0.87m、深さ0.16m、長軸方位はN-67°-Eである。出土遺物は第17図1・2に掲載した。1は瀬戸の鉢、2は常滑の播鉢である。

第7号土壌 (第15図)

D-4グリッドから検出された。平面形態は隅丸方形である。規模は長軸0.71m、短軸0.56m、深さ0.12m、長軸方位はN-27°-Wである。

第8号土壌 (第15・17図)

C・D-5グリッドから検出された。平面形態はほぼ円形である。規模は長軸1.21m、短軸



- SK 1
1 黒褐色土 ロームブロック (径1~5mm)・ローム粒子若干
- SK 2
1 黒褐色土 ロームブロック (径1~3mm) 若干 ローム粒子やや多量
2 黒褐色土 ロームブロック (径1~7mm) 若干 ローム粒子少量
- SK 3
1 黒褐色土 ロームブロック (径1~5mm)・炭化物 (径1~3mm) 少量
ローム粒子若干
- SK 4
1 暗灰褐色土 ロームブロック (径1~20mm) 若干 ローム粒子やや多量
- SK 5
1 暗褐色土 ロームブロック (径1~5mm) 少量 ローム粒子若干
2 黒褐色土 ロームブロック (径1~3mm)・ローム粒子少量
3 暗褐色土 ロームブロック (径1~3mm)・ローム粒子若干
- SK 6
1 暗褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 若干 ローム粒子少量
2 黒褐色土 ロームブロック (径1~10mm)・炭化物やや多量
ローム粒子少量
3 暗褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 多量 ローム粒子若干
- SK 7
1 黒褐色土 ロームブロック (径1~3mm)・ローム粒子若干
2 暗灰褐色土 ロームブロック (径1~3mm) 若干 ローム粒子やや多量
- SK 8
1 黒褐色土 ロームブロック (径1~15mm) やや多量 ローム粒子若干
2 黒褐色土 ロームブロック (径1~5mm) 若干 ローム粒子少量
- SK 9
1 黒褐色土 ロームブロック (径1~5mm) やや多量 ローム粒子少量
2 暗褐色土 ロームブロック (径1~3mm) 少量 ローム粒子若干
3 暗褐色土 ロームブロック (径1~3mm) 多量 ローム粒子若干

- SK 10
II 黒褐色土 ロームブロック (径1~3mm)・灰色シルト若干
ローム粒子少量 (表土層)
1 黒褐色土 ロームブロック (径1~3mm) 若干 ローム粒子少量
2 黒褐色土 ロームブロック (径1~5mm) やや多量 ローム粒子少量
3 黒褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 多量 ローム粒子若干
- SK 11
II 黒褐色土 ロームブロック (径1~3mm)・灰色シルト若干 ローム粒子少量
1 黒褐色土 ロームブロック (径1~15mm) やや多量
ローム粒子・灰色シルト少量
2 黒褐色土 ロームブロック (径1~5mm)・ローム粒子・灰色シルト少量
- SK 12
1 暗褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 若干 ローム粒子少量 砂少量
- SK 14
1 暗灰褐色土 ロームブロック (径1~10mm) やや多量
2 暗灰褐色土 ロームブロック (径1~20mm) 少量
- SK 15
1 暗灰褐色土 ロームブロック (径1~10mm) やや多量 ローム粒子少量
2 暗褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 少量
- SK 16
1 暗灰黄褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 少量 ローム粒子若干
- SK 17・18
1 暗灰褐色土 ロームブロック (径1~3mm) 若干 ローム粒子少量
2 暗灰褐色土 ロームブロック (径1~5mm) 若干 ローム粒子少量
3 暗褐色土 ロームブロック (径1~5mm) 若干

第15図 土壌 (1)

1.04 m、深さ 0.51 m、長軸方位はN-4°-W
である。出土遺物は第 17 図 3・4 に掲載した。
3 は瀬戸の碗、4 は在地の焙烙である。

第 9 号土壙 (第 15・17 図)

C・D-5 グリッドから検出された。平面形態
は楕円形である。規模は長軸 1.49 m、短軸 0.98
m、深さ 0.41 m、長軸方位はN-33°-Wである。
出土遺物は第 17 図 5 に掲載した常滑の甕である。

第 10 号土壙 (第 15 図)

D-5 グリッドから検出された。第 4 号溝と重
複している。南側は調査区域外にあたる。平面形
態は不整形である。規模は長軸 0.67 m、検出範
囲で短軸 0.21 m、深さ 0.35 m、長軸方位はN
-67°-Eである。

第 11 号土壙 (第 15 図)

D-5 グリッドから検出された。南側は調査区
域外にあたる。平面形態は不整形である。規模
は長軸 0.88 m、検出範囲で短軸 0.35 m、深さ
0.10 m、長軸方位はN-66°-Eである。

第 12 号土壙 (第 15 図)

C-6 グリッドから検出された。平面形態は不
整形である。規模は長軸 0.84 m、短軸 0.78 m、
深さ 0.06 m、長軸方位はN-61°-Eである。

第 13 号土壙 (第 15 図)

C-4 グリッドから検出された。第 3・4 号溝
跡と重複している。北側は調査区域外にあたる。
平面形態は不整形である。規模は長軸 1.29 m、
検出範囲で短軸 0.59 m、深さ 0.27 m、長軸方
位はN-81°-Eである。

第 14 号土壙 (第 15 図)

D-2 グリッドから検出された。平面形態は隅
丸方形である。規模は長軸 0.64 m、短軸 0.53 m、
深さ 0.26 m、長軸方位はN-72°-Eである。

第 15 号土壙 (第 15 図)

D-2 グリッドから検出された。平面形態は隅
丸方形である。規模は長軸 0.64 m、短軸 0.51 m、
深さ 0.29 m、長軸方位はN-72°-Eである。

第 16 号土壙 (第 15・17 図)

C-3 グリッドから検出された。平面形態は不
明である。規模は長軸 0.57 m、短軸 0.32 m、深
さ 0.11 m、長軸方位はN-41°-Wである。出
土遺物は第 17 図 6 に掲載した瀬戸碗である。

第 17 号土壙 (第 15 図)

C-3 グリッドから検出された。第 18 号土壙
と重複している。北側は調査区域外にあたる。平
面形態は不整形である。規模は検出範囲で長軸
1.27 m、短軸 0.44 m、深さ 0.16 m、長軸方位
はN-11°-Wである。

第 18 号土壙 (第 15 図)

C-3 グリッドから検出された。第 17 号土壙
と重複している。北側は調査区域外にあたる。平
面形態は不整形である。規模は長軸 3.42 m、短
軸 1.55 m、深さ 0.11 m、長軸方位はN-72°-
Eである。

第 19 号土壙 (第 16 図)

C-3 グリッドから検出された。第 20 号土壙
と重複している。平面形態は楕円形である。規模
は長軸 1.71 m、短軸 0.74 m、深さ 0.08 m、長
軸方位はN-71°-Eである。

第 20 号土壙 (第 16 図)

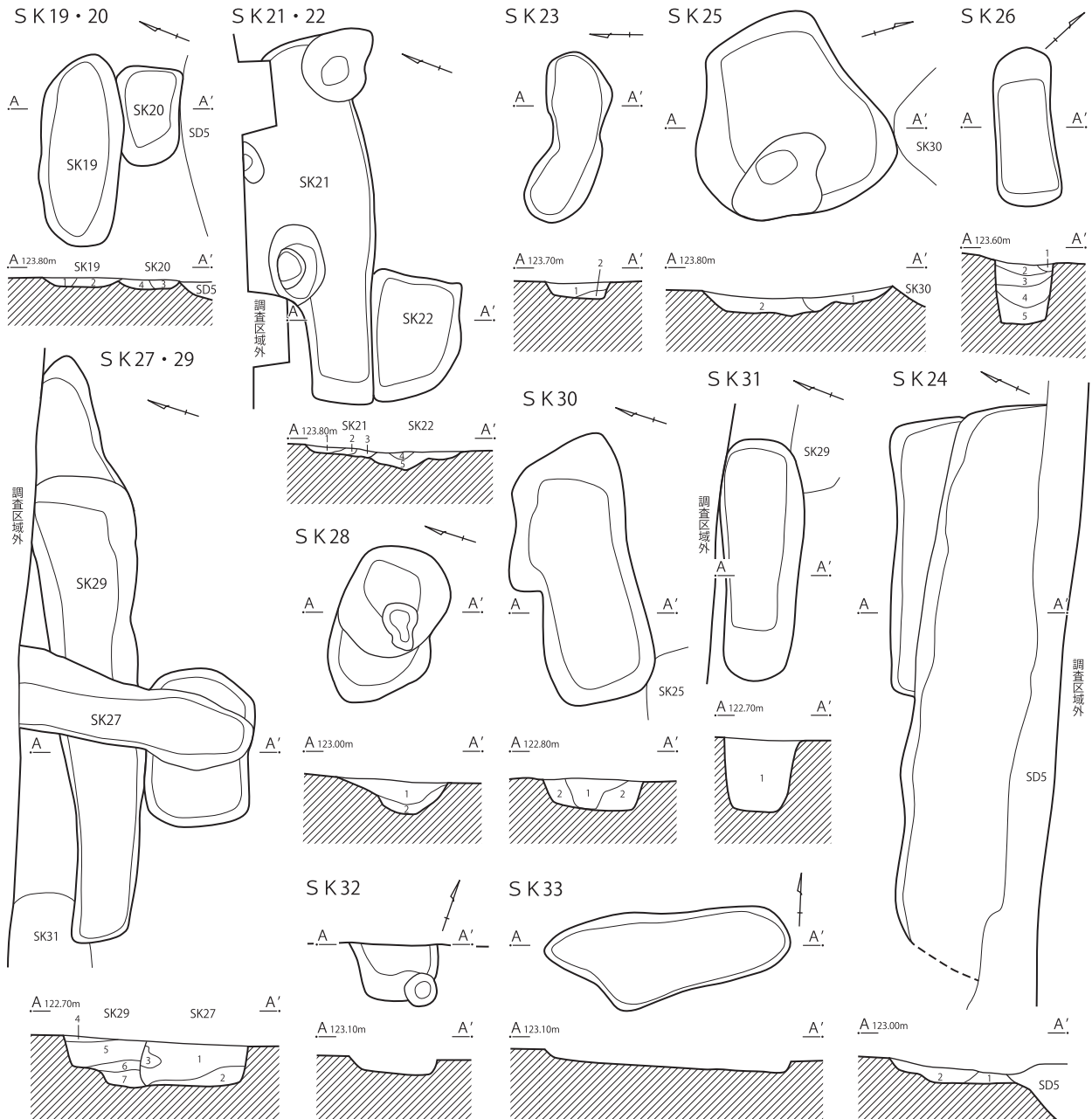
C-3 グリッドから検出された。第 5 号溝跡、
第 19 号土壙と重複している。平面形態は不整
形である。規模は長軸 0.89 m、検出範囲で短軸
0.52 m、深さ 0.08 m、長軸方位はN-68°-E
である。

第 21 号土壙 (第 16 図)

C-3 グリッドから検出された。第 22 号土壙
と重複している。北側は調査区域外にあたる。平
面形態は不整形である。規模は長軸 3.34m、検
出範囲で短軸 1.17 m、深さ 0.06 m、長軸方位
はN-66°-Eである。

第 22 号土壙 (第 16 図)

C-3 グリッドから検出された。第 21 号土壙
と重複している。平面形態は不整形である。規模



- S K 19・20
 1 黄褐色土 ローム粒子多量
 2 暗黄褐色土 ロームブロック (径1~7mm)・ローム粒子やや多量
 3 黄褐色土 ローム粒子多量
 4 暗褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 若干 ローム粒子やや多量

- S K 21・22
 1 暗褐色土 ロームブロック (径1~3mm) 若干
 2 暗黄褐色土 ロームブロック (径1~7mm) 若干 ローム粒子やや多量
 3 暗黄褐色土 ロームブロック (径1~3mm) やや多量 ローム粒子若干
 4 黄褐色土 ローム粒子少量
 5 暗黄褐色土 ロームブロック (径1~20mm)・ローム粒子若干

- S K 23
 1 暗褐色土 ロームブロック (径1~3mm) 少量
 2 暗褐色土 ロームブロック (径1~5mm) 若干

- S K 24
 1 暗灰褐色土 ロームブロック (径1~30mm) ローム粒子少量
 2 暗黄褐色土 ローム粒子多量

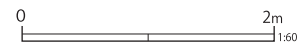
- S K 25
 1 暗灰褐色土 ロームブロック (径1~3mm) やや多量 ローム粒子少量
 2 暗灰褐色土 ロームブロック (径1~10mm) 若干 炭化物 (径1~3mm) 若干

- S K 26
 1 灰黄褐色土
 2 暗褐色土 ローム粒子多量
 3 暗褐色土 ロームブロック多量
 4 暗褐色土 ローム粒子・ローム小ブロック多量
 5 暗黄褐色土

- S K 28
 1 暗褐色土 ロームブロック (径1~3mm) 若干 炭化物 (径1~3mm) 少量
 2 暗褐色土 ロームブロック (径1~10mm) やや多量 ローム粒子少量

- S K 30
 1 暗灰褐色土 ロームブロック (径1~3mm) 若干 ローム粒子少量
 2 暗褐色土 ロームブロック (径1~40mm) やや多量 ローム粒子少量

- S K 31
 1 暗黄褐色土 ロームブロック (径1~60mm)・ローム粒子やや多量



第 16 図 土 壌 (2)

は長軸 1.11 m、短軸 0.80 m、深さ 0.16 m、長軸方位はN-77°-Eである。

第 23 号土壙 (第 16 図)

C-4 グリッドから検出された。平面形態は不整形である。規模は長軸 1.52 m、短軸 0.60 m、深さ 0.14 m、長軸方位はN-84°-Wである。

第 24 号土壙 (第 16 図)

B-7 グリッドから検出された。第 5 号溝と重複している。平面形態は不整形である。南側は調査区域外にあたる。規模は検出範囲で長軸 5.02 m、検出範囲で短軸 1.27 m、深さ 0.13 m、長軸方位はN-67°-Eである。

第 25 号土壙 (第 16 図)

A-8 グリッドから検出された。第 30 号土壙と重複している。平面形態は不整形である。規模は長軸 1.82 m、短軸 1.76 m、深さ 0.14 m、長軸方位はN-89°-Wである。

第 26 号土壙 (第 16 図)

A-8 グリッドから検出された。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸 1.43 m、短軸 0.52 m、深さ 0.53 m、長軸方位はN-47°-Wである。

第 27 号土壙 (第 16 図)

A-8 グリッドから検出された。第 29 号土壙と重複している。平面形態は不整形である。規模は検出範囲で長軸 2.13 m、短軸 1.43 m、深さ 0.37 m、長軸方位はN-11°-Wである。

第 28 号土壙 (第 16 図)

A・B-7 グリッドから検出された。平面形態

は不整形である。規模は長軸 1.48 m、短軸 0.92 m、深さ 0.28 m、長軸方位はN-89°-Wである。

第 29 号土壙 (第 16 図)

A-8・9 グリッドから検出された。第 27・31 号土壙と重複している。北側は調査区域外にあたる。規模は長軸 5.21 m、短軸 0.91 m、深さ 0.41 m、長軸方位はN-66°-Eである。

第 30 号土壙 (第 16・17 図)

A-8 グリッドから検出された。第 25 号土壙と重複している。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸 2.33 m、短軸 1.06 m、深さ 0.27 m、長軸方位はN-61°-E である。出土遺物は第 17 図 7 に掲載した天目茶碗である。

第 31 号土壙 (第 16 図)

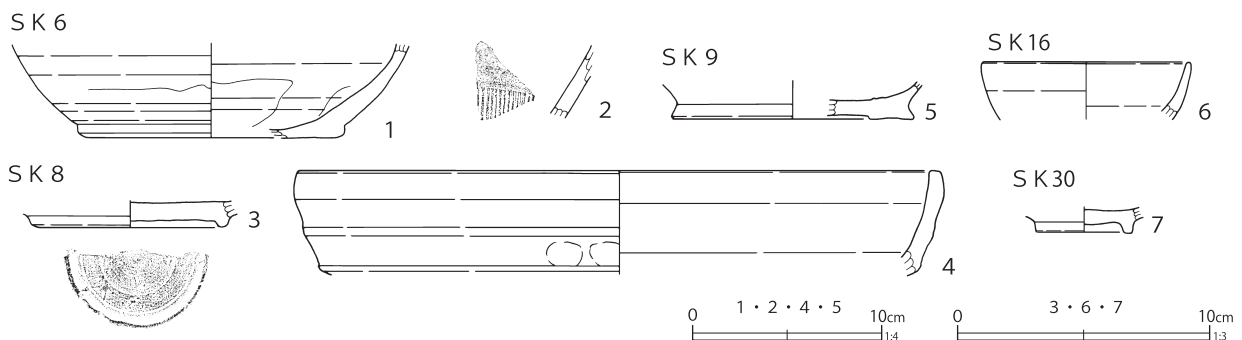
A-8 グリッドから検出された。第 29 号土壙と重複している。北側は調査区域外にあたる。平面形態は隅丸長方形である。規模は長軸 2.16 m、短軸 0.69 m、深さ 0.65 m、長軸方位はN-71°-E である。

第 32 号土壙 (第 16 図)

A-7 グリッドから検出された。北側は調査区域外にあたる。平面形態は不整形である。規模は長軸 0.77 m、検出範囲で短軸 0.50 m、深さ 0.12 m、長軸方位はN-71°-E である。

第 33 号土壙 (第 16 図)

B-7 グリッドから検出された。平面形態は不整形である。規模は長軸 2.22 m、短軸 0.87 m、深さ 0.11 m、長軸方位はN-87°-E である。



第 17 図 土壙出土遺物

第1表 土壌出土遺物観察表 (第17図)

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	SK6	陶器	鉢	—	[5.0]	(14.0)	E I	20	普通	灰白	瀬戸 内外面施釉 B区	
2	SK6	陶器	挿鉢	—	[3.9]	—	H I K	5	良好	にぶい褐	瀬戸 内外面施釉 B区	
3	SK8	陶器	碗	—	[1.1]	7.2	H I	50	良好	灰黄	瀬戸 内外面施釉 底部にも釉がたれている B区	6-6
4	SK8	瓦質陶器	焙烙	(33.4)	[5.5]	—	C H I K	5	普通	灰黄褐	指頭痕	
5	SK9	陶器	甕	—	[2.0]	(12.6)	I K	10	良好	灰白	常滑 内面にトチ痕 内面全面施釉 外面施釉	6-6
6	SK16	陶器	碗	8.0	[2.3]	—	K	10	良好	灰白	瀬戸 内外面全面施釉	6-6
7	SK30	陶器	天目茶碗	—	[1.0]	[3.7]	I K	40	良好	灰白	瀬戸 底部接地面以外施釉	6-6

4. 井戸跡

井戸跡は調査区の北東端で1基検出された。

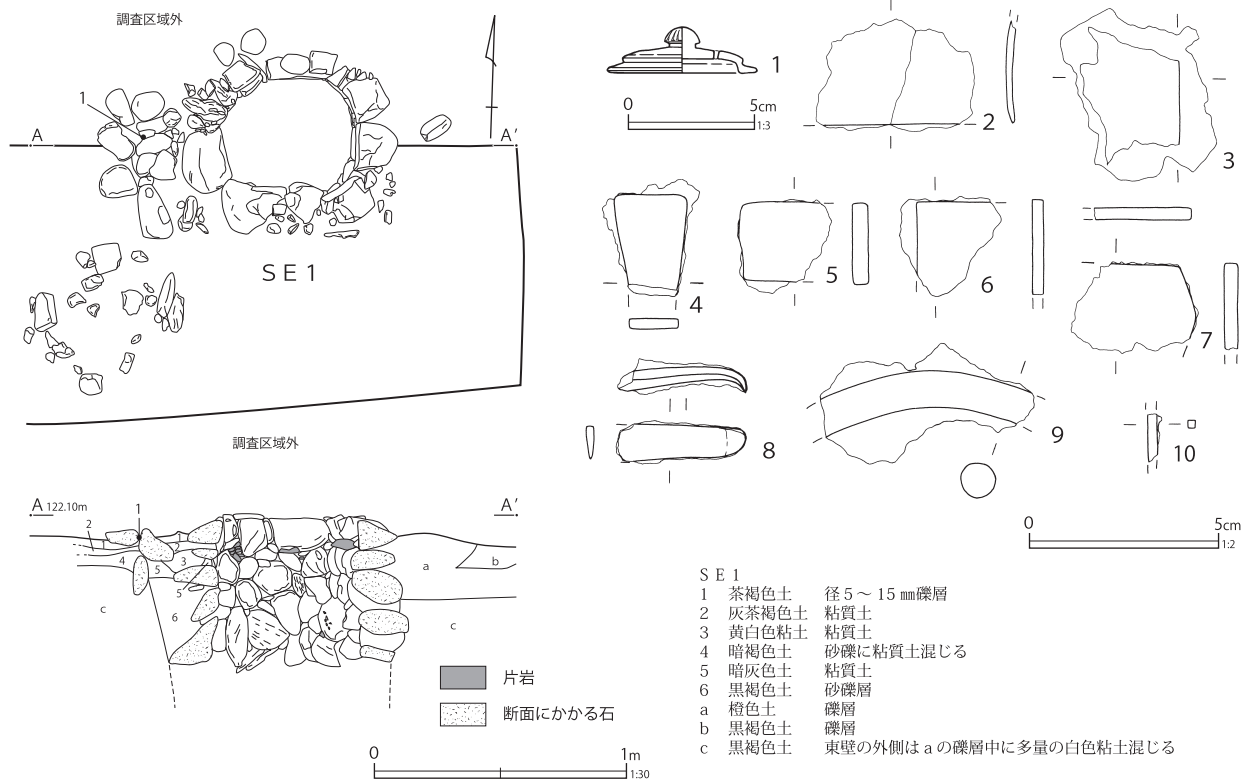
第1号井戸跡 (第18図)

A-10グリッドに位置する。段丘の礫層を掘り込んで構築されていた。形態は円形で、掘り方の規模は上径1.01m、下径0.82mである。調査は崩落の危険があるため深さ1.16mまで掘削をした。

井戸の壁面には長径20cm前後の河原石が積み重ね、隙間にこぶし大の河原石や片岩が充填されて

いる。井戸跡の西側に石が検出された。石の下部には浅い掘り込みが確認され、灰茶褐色の粘質土が貼り込んであった。

出土遺物は、覆土中から第18図1に掲載した口径5.8cmの瀬戸焼の急須蓋が出土し、時期は近世以降である。井戸跡の周囲から2～10の鉄片が出土している。2～7は鉄板状品、8は刀子、9は断面が丸い棒状品、10は断面が角状の棒状品である。



第18図 第1号井戸跡・出土遺物

第2表 第1号井戸跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	SE1	陶器	蓋	5.8	1.8	—		60	良好	紫灰	瀬戸 No.1	6-6

5. 溝跡

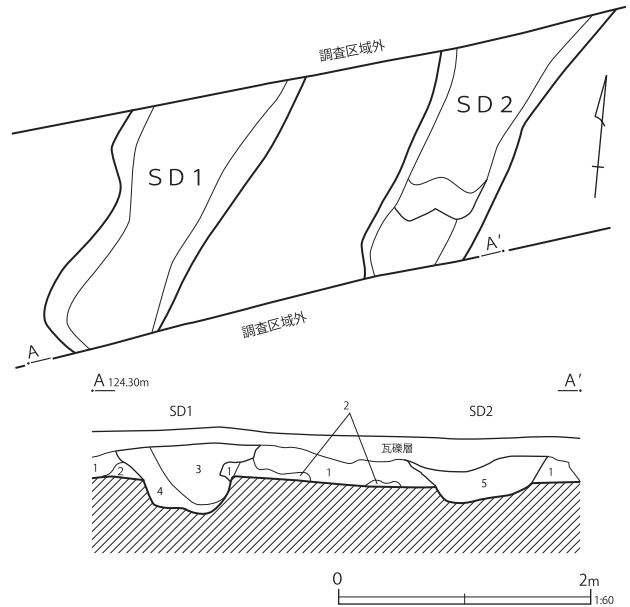
溝跡は5条検出された。第1・2号溝跡は並行して、調査区を横断するように検出された。出土遺物がないため時期は不明である。第3号溝跡と第5号溝跡は第1・2次調査区の縁に沿って検出されたことから、道路の両側側溝と考えられる。現道を挟んで両溝の間隔は外側で約7.5m、内側で約6.0mとなり、旧道路幅が6.0mより狭かったことになる。出土遺物から近世以降の溝跡である。

第1号溝跡 (第19図)

D-2・3グリッドを南西から北東に向かって伸びる。断面形は逆台形である。規模は幅0.75～1.10m、長さ2.20m、深さ0.20～0.50mである。走行方向はN-17°-Eである。

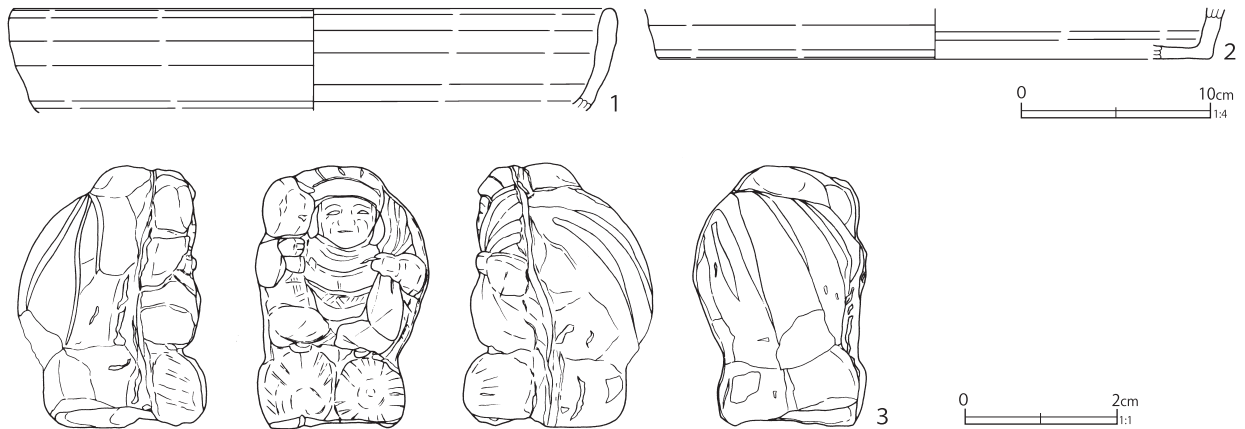
第2号溝跡 (第19図)

D-3グリッドを南西から北東に向かって伸びる。断面形は逆台形である。規模は幅0.75～



- 1 暗褐色土 ローム粒子若干
- 2 暗黄褐色土 ロームブロック (径1～5mm)・ローム粒子若干
- SD1
- 3 暗褐色土 ロームブロック (径1～2mm) 少量 炭化物少量
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック (径1～5mm) 若干 ローム粒子やや多量
- SD2
- 5 暗褐色土 ロームブロック (径1～5mm) 若干 ローム粒子若干

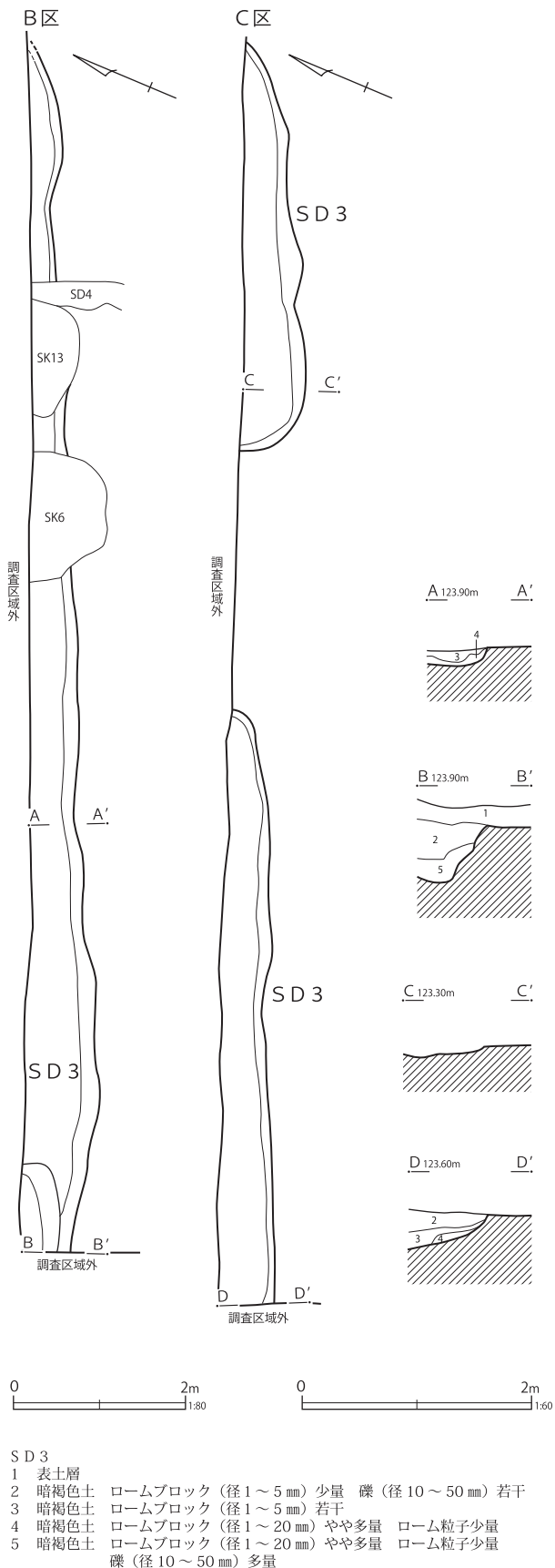
第19図 第1・2号溝跡



第20図 第3号溝跡出土遺物

第3表 第3号溝跡出土遺物観察表 (第20図)

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	SD3	瓦質陶器	焙烙	(31.2)	[5.4]	—	H I K	5	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
2	SD3	瓦質陶器	焙烙	—	[2.7]	(28.8)	C H I K	10	普通	にぶい黄橙	外面煤付着	
3	SD3	土製品	犬黒様	高さ3.5cm 幅2.3cm			H I	95	普通	にぶい橙	B区	
				厚さ2.5cm 重さ14.8g								



第21図 第3号溝跡

0.90 m、長さ 2.20 m、深さ 0.12 ~ 0.33 m である。走行方向はN-20°-Eである。

第3号溝跡 (第20・21図)

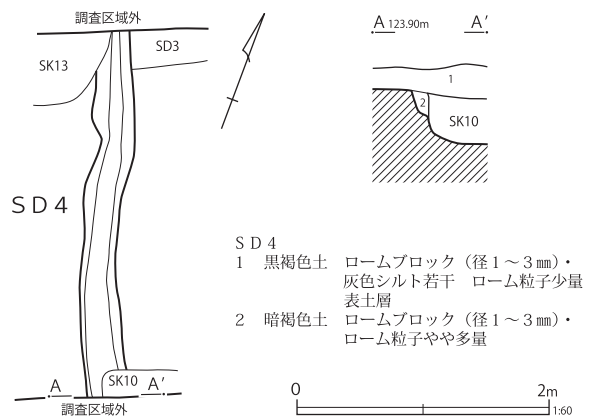
C-4~7、D-3・4グリッドを南西から北東に向かって伸びる。断面形は浅い皿状である。重複する第4号溝跡、第6・13号土壌に壊されている。北側が調査区域外にあたるため溝跡の幅は不明である。検出範囲で長さ 25.30 m、深さ 0.07 ~ 0.48 m である。走行方向はN-65°-E である。出土遺物は第20図1~3である。1・2は在地の焙烙の破片である。3は土製品の素焼きの大黒様である。米俵の上に座り左手に大きな袋を肩にかけ、右手に小槌を持っている。高さ 3.5 cmと小型である。

第4号溝跡 (第22図)

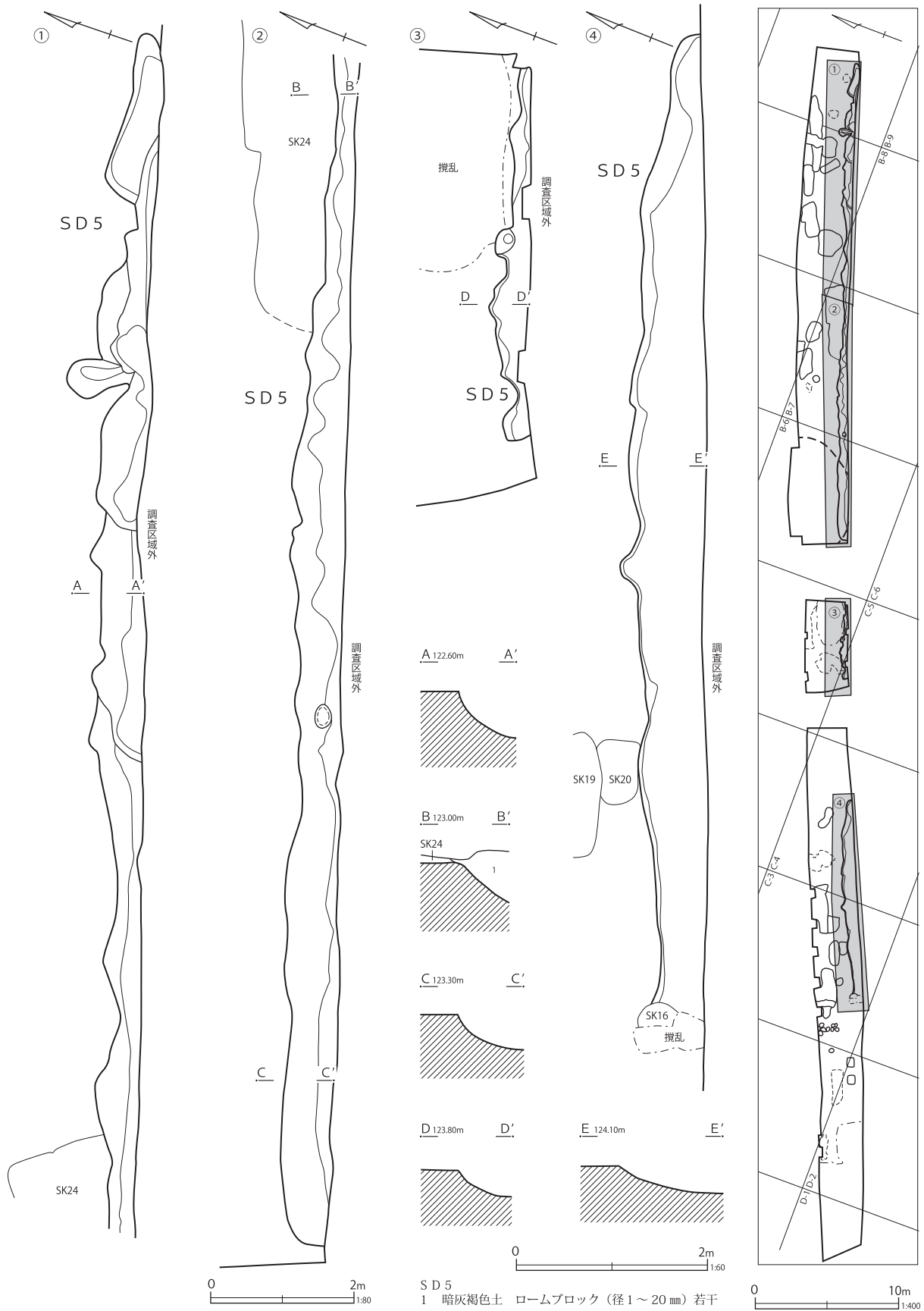
C-4・5、D-5グリッドを南北に伸びる。重複する第3号溝跡を壊し、第10・13号土壌に壊されている。断面形は逆台形である。規模は幅 0.25 ~ 0.40 m、長さ 2.90 m、深さ 0.06 ~ 0.22 m である。走行方向はN-19°-W である。

第5号溝跡 (第23図)

A-8・9、B-5~8、C-3~5グリッドを南西から北東に向かって伸びる。第16・20・24号土壌と重複し第24号土壌を壊している。断面形は不明である。規模は幅 1.10 ~ 0.20 m、検出範囲で長さ 52.0 m、深さ 0.25 ~ 0.50 m である。走行方向はN-67°-E である。



第22図 第4号溝跡

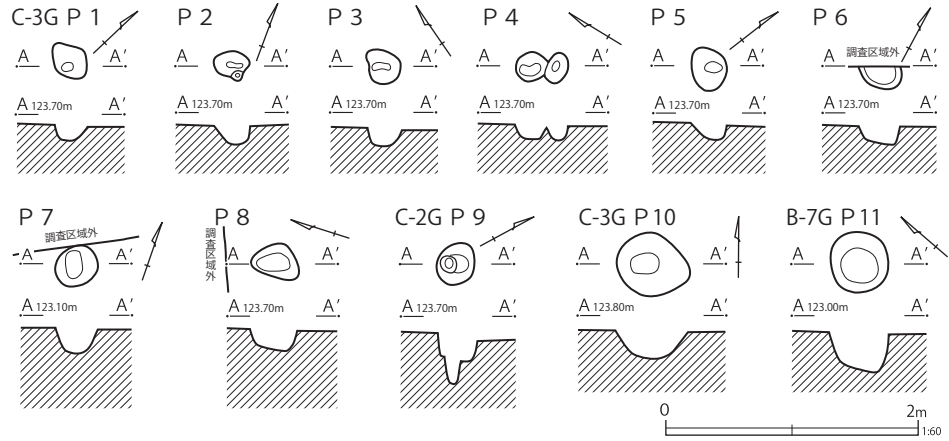


第23図 第5号溝跡

6. ピット

調査区からは11基のピットが検出された。ピットは調査区の西側C-3グリッドに集中する。

出土遺物は検出されなかった。時期や性格は不明である。

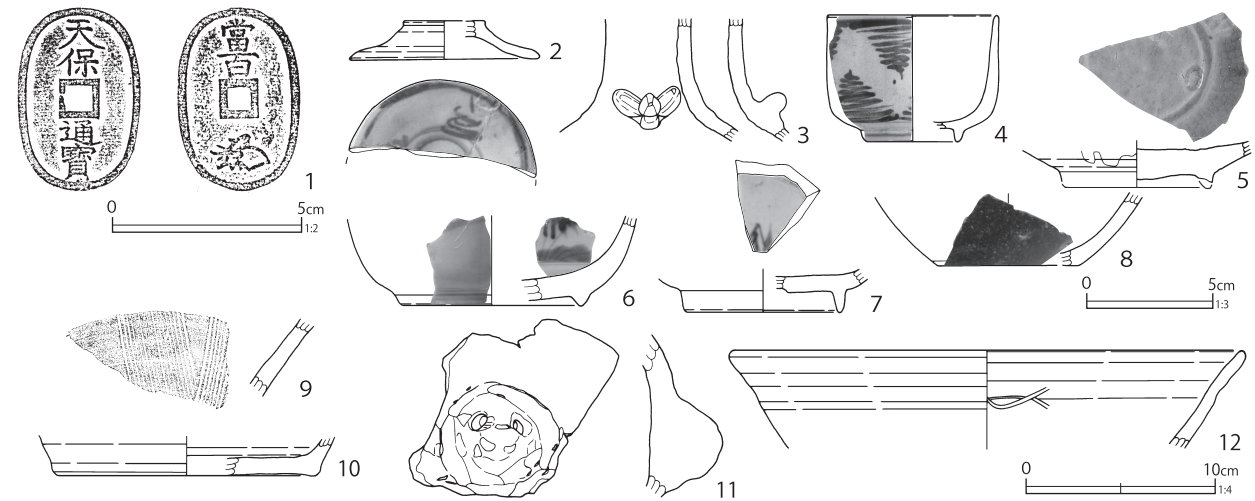


第24図 ピット

7. その他の出土遺物

調査区の遺構外からは近世以降の遺物が出土した。第25図1は古銭で「天保通寶」である。江戸時代末期から明治にかけて流通した。裏面には

「當百」と表記され金座後藤家の花押が鑄込まれている。重量は5.5匁(約20.5g)である。その他、肥前、瀬戸、常滑などの陶磁器が出土している。



第25図 その他の出土遺物

第4表 その他の出土遺物観察表(第25図)

番号	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	グリッド	古銭	天保通寶	縦 48.20 mm	横 32.10 mm	厚さ 1.90 ~ 2.10 mm	重さ 20.5g				A-10 G 礫層 裏面に當百と花押	
2	グリッド	陶器	蓋	—	2.5	(7.2)		45	良好	灰白	肥前 施釉 B-6 G	6-6
3	SJ1	陶器	花瓶	—	[4.8]	—		80	良好	灰白	瀬戸 SJ1上層	
4	SJ1	陶器	碗	(6.5)	5.0	(3.6)		15	良好	白	肥前 SJ1上層	6-6
5	表採	陶器	皿	—	[1.7]	—	E I	20	良好	灰白	瀬戸 施釉 B区	6-6
6	グリッド	陶器	碗	—	[3.6]	(7.0)		10	良好	灰白	肥前 施釉 B-6 G	6-6
7	グリッド	陶器	碗	—	[1.2]	[6.0]		15	良好	白	肥前 施釉 B-6 G	6-6
8	SJ1	陶器	天目茶碗	—	[2.8]	(5.6)	I	15	良好	灰黄	瀬戸 SJ1No78 施釉	6-6
9	表採	陶器	播鉢	—	[4.1]	—	I K	5	普通	灰白	常滑 C区	
10	グリッド	瓦質陶器	火鉢	—	[2.1]	(13.8)	A H I	10	普通	灰	回転ヘラケズリ A-7 G	
11	グリッド	瓦質陶器	火鉢	—	[9.3]	—	C H I K	5	普通	褐灰	2次C-4 G	
12	表採	陶器	鉢	(26.6)	[5.2]	—	I	5	良好	灰黄	瀬戸 施釉 C区攪乱	

V 調査のまとめ

1. 調査の成果

立原小路遺跡は、埼玉県大里郡寄居町立原地内に所在する。第1・2次調査では縄文時代中期の竪穴住居跡1軒、近世の土壇33基、井戸跡1基、溝跡5条、ピット11基が検出された。調査面積は633㎡である。遺跡の標高は120～125mである。

調査区の中央部で検出された縄文時代中期の住居跡は、石囲い炉を伴う敷石住居跡である。炉跡は造り替えが行われており、住居内には埋甕も検出された。縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期の敷石住居が検出されたことは注目すべき成果である。これまで寄居町内で検出された敷石住居跡は、樋ノ下遺跡や露梨子遺跡で知られているが、いずれも縄文時代後期にあたる。立原小路遺跡で検出された敷石住居跡は、埼玉県における敷石住居跡の出現を考える上で貴重な資料となる。

調査区東端で検出された近世の井戸跡は、井戸壁面を20cm前後の河原石で円形に積み上げて構築された石組み井戸である。時期は裏込めの土の中から出土した常滑の急須蓋から、江戸時代末期から明治時代と考えられる。

5条の溝跡のうち、第1次調査区の第3号溝跡と第2次調査区の第5号溝跡は現在の道路に沿って検出されたことから、先行する道路の両側に設けられた側溝と考えられる。掘削は出土遺物からみて近世以降である。調査区からは道路に沿って井戸跡や土壇が検出され、陶磁器が出土している。このことから近世になると、遺跡周辺では道路沿いに屋敷地が広がっていたと考えられる。

遺跡名の立原小路は、小字名であるが、周辺には鉄砲小路、鍛冶小路などの地名が残り、北東約600mにある鉢形城の城下町として整備されたことからついた地名とみられる。しかし、今回の調査では、この時期の遺構を検出することはできず、中世の様相については明らかにならなかった。

2. 縄文時代中期の様相

今回の発掘調査では中期後半の竪穴住居跡1軒が出土した。調査地点の西500mには、勝坂～加曾利E式期の大集落と目される増善寺遺跡が所在しており、本遺跡はこれを母村とする衛星的な小集落のひとつと考えることができる。

第1号住居跡出土遺物のうち代表的なものを第26図に再掲した。4個体の復元土器のうち、明らかに本住居跡に伴うのはBの埋甕である。

Dのキャリパー類深鉢は床面直上から出土した伏甕である。周囲に浅い掘り込みを伴うが、一方で口縁の一部が敷石上に乗っており、住居廃絶に関わる何らかの行為に伴うものと考えられる。

Aのキャリパー類大型深鉢は覆土中～下層からの出土であるが、その文様構成がDの個体とほぼ共通しており、同時期のものと考えていいだろう。Cの小型深鉢口縁部は炉周辺から出土しているが、一括遺物としての確実性は最も低い。

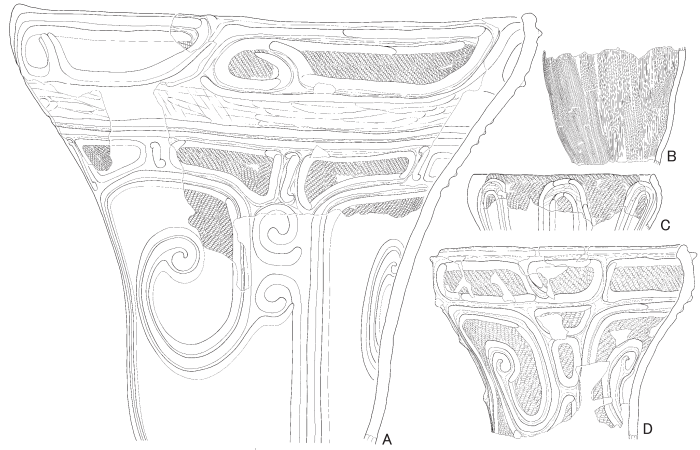
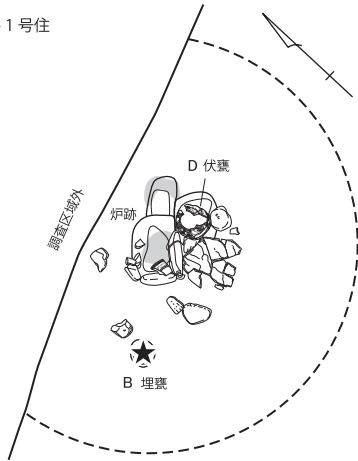
全体として加曾利EⅢ式期の土器といえるが、A・Dについては口縁部の区画文が明瞭に残存し、胴部に東信～北関東系の唐草文土器のモチーフを取り入れている。キャリパー形の器形も崩れが少なく、Aでは頸部無文帯が残存するなど、総合的に加曾利EⅢ式でも古相の土器群である。

一方で、Cは波状・逆U字ないし玉抱きのモチーフを磨り消し縄文により描き出すもので、加曾利EⅢ式新段階の可能性はある。Bについては半粗製の土器であり、時期判定の材料に乏しい。

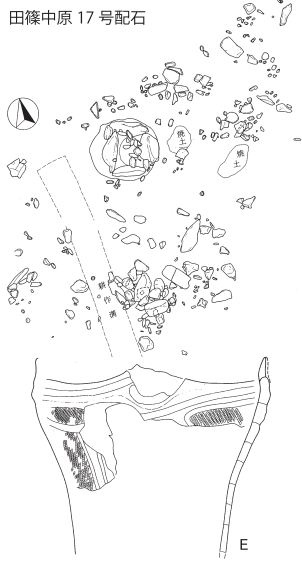
出土状況にやや難のあるCを除外すれば、立原小路第1号住居跡出土土器は、加曾利EⅢ式古段階の一括資料であるといえることができる。

周辺における同時期の遺構としては、同じ寄居市内のゴシン遺跡第2号住居跡(加曾利EⅢ式新段階)・秩父市(旧荒川村)の姥原遺跡第3号住居跡(同EⅢ式古段階)を挙げることができるほ

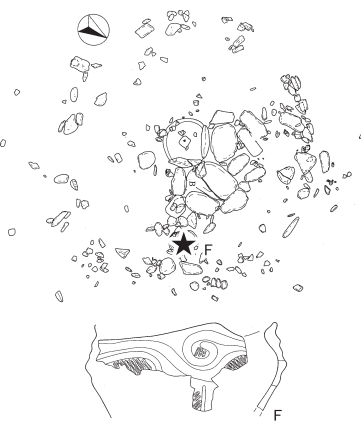
立原小路1号住



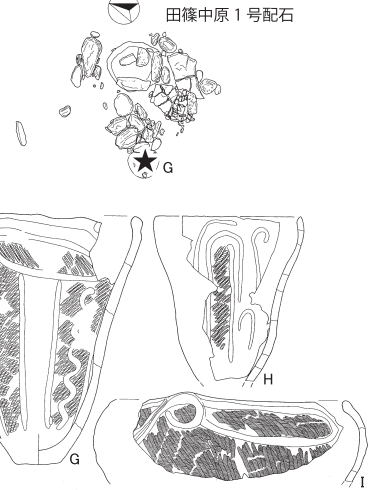
田篠中原17号配石



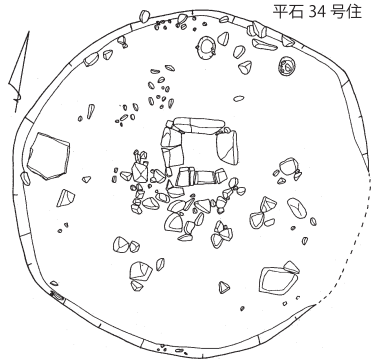
田篠中原5号配石



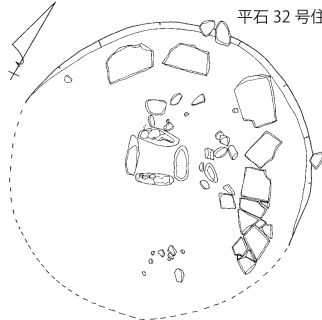
田篠中原1号配石



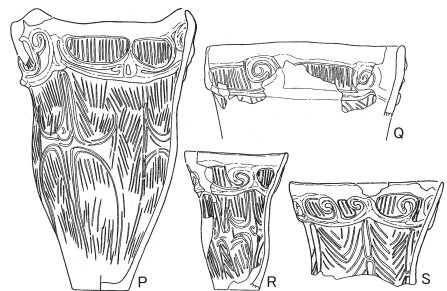
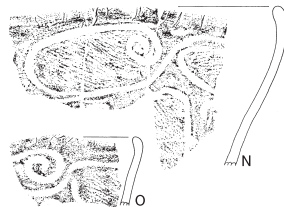
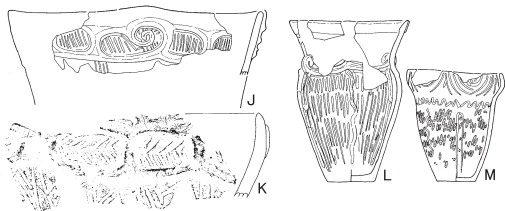
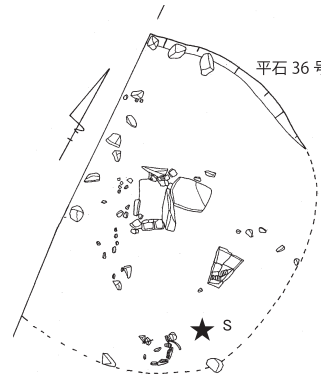
平石34号住



平石32号住



平石36号住



第26図 加曾利EⅢ式期の円形敷石住居跡 (縮尺不同)

か、隣接する増善寺遺跡にも同時期の集落の存在が予想される。また、吉田町の塚越向山遺跡ではこの時期、環状列石をはじめとする配石遺構群の構築が開始されており、群馬県西部の配石遺構群との関係性が色濃くみられる。

ここで、住居跡本体の特徴に目を移してみる。部分的な発掘であり、壁をすべて失うなど、確認状況は決して良好とは言えないが、方形の石囲い炉を持ち、周囲に結晶片岩の敷石と埋甕を伴うことから、いわゆる敷石住居であった可能性が高い。

柄鏡形住居跡である可能性も考慮して慎重に調査を進めたが、張り出し部先端の埋甕は確認できず、また、埋甕周辺に張り出し接続部のピット群も検出できなかったため、比較的小規模な円形住居跡と考えられる。

埼玉県内では石材供給源に近い西部を中心に数多くの敷石住居跡が発見されている。寄居町樋の下遺跡、皆野町駒形遺跡、旧児玉町古井戸遺跡、坂戸市牛原遺跡、日高市寺脇遺跡、飯能市上町東遺跡、入間市坂東山遺跡等は、いずれも柄鏡形住居跡であり、しかも称名寺式土器出現以降のものと考えられる。

称名寺式以前とみられる日高市宿東遺跡第48号(柄鏡形)住居跡の配石は、壁柱穴に沿った周礫に近いものとなっており、本格的な敷石の出現は後期以降で、しかも柄鏡型住居跡に伴うものと考えべきだろう。

この点、加曾利EⅢ式でも古い特徴を持つ土器群を伴い、柄鏡形でなかった可能性の高い立原小

路遺跡第1号住居跡はやや異質な存在といえる。

そこで、目を周辺近県に広げて、加曾利EⅢ式古段階に遡る可能性のある円形の敷石住居跡の類例を収集してみた。第26図中の★印は埋甕を示す。

群馬県富岡市の田篠中原遺跡第1号・5号・17号配石はいずれも明瞭な張り出し部を持たない。方形の石囲い炉を持ち、配石は炉周辺の敷石と、プラン周縁の配礫に限定されている。遺物はいずれも加曾利EⅢ式期で、E・Fについては古段階の可能性もあろう。

長野県望月町の平石遺跡でも複数の円形敷石住居跡を見ることができる。いずれも方形の石囲い炉を持ち、敷石は炉周辺とプラン周縁に限定されている。遺物の時期については地域色も含め検討が必要となるが、第34号住居跡のL・Mといった唐草文系・曾利Ⅱ式系の土器を共伴と考えるならば、全体として加曾利EⅢ式古段階に位置付けるのが妥当だろう。

また、図示しなかったが岡谷市花上寺遺跡第17号住居跡も加曾利EⅢ式期の円形(部分)敷石住居で、新段階のものと考えられる。

立原小路遺跡の敷石住居跡の出現にあたっては、柄鏡形敷石住居の成立に先立つ円形敷石住居の系譜を想定しないかぎり理解が難しい。

今回、その系譜が北関東西縁部～東信地域に存在すると仮定して関連資料の提示を試みた。今後、より広域における動向や、群馬県西部における中期後半の配石遺構出現の問題等ともあわせて、資料の収集・分析に努めたい。

引用・参考文献

- 菊池 実 1990 『田篠中原遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第112集
高橋重水 1996 『郷土の文化財19 花上寺遺跡』長野県岡谷市教育委員会
福島邦男 1991 『平石遺跡』望月町文化財調査報告書第19集
細田勝・岩田明広 1994 『樋ノ下遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第135集
松本美佐子 2009 『むじな塚遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第364集
寄居町教育委員会町史編さん室 1984 『寄居町史 原始古代中世資料編』寄居町教育委員会
寄居町教育委員会町史編さん室 1986 『寄居町史 通史編』寄居町教育委員会